

「保育内容・表現」におけるオペレッタの授業実践

山中愛美

YAMANAKA Aimi

本学児童教育学科は、「保育内容・表現」の授業の中にオペレッタを取り入れている。保育者養成校として、授業の中で他者との関わり、協力し合いながら学習していく機会を増やさなければいけないと考えているからである。授業を通して表現力を高めるだけでなく、仲間との協同作業により、保育者としての資質の向上を目指した。本稿は、授業内容をまとめ、学生のレポートから、オペレッタによる表現力向上と仲間と協力して作品を作り上げていく楽しさが伺えた。

キーワード：保育者養成、保育内容・表現、オペレッタ

返りから教育効果を読み取り、今後の授業推進のための一資料とする。

1. はじめに

保育内容 表現は、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」という観点から設けられた領域である。⁽¹⁾

子どもは、手あそび、リズムあそび、ごっこあそびといった、あそびを通して、他者と触れ合い、これらの能力を身につけていく。子どもたちがその能力を身につけようと支援するのが保育者の役割である。しかし、人間関係が希薄になってきているといわれる現代において、これらを身に付けることは、子どもだけでなく、学生にも共通して重要である。子どもと同様に豊かな感情、表現力を高めるには、より多くの他者との関わりを持つことが大切である。

保育者養成校として、授業の中で他者との関わり、協力し合いながら学習していく機会を増やさなければいけないと考えている。そこで、本学児童教育学科で開講している「保育内容・表現」という授業の中で、オペレッタを制作 発表し、表現力を高めるだけでなく、仲間との協同作業により、保育者としての資質の向上を目指した。本稿は、保育内容・表現の授業内容とオペレッタ制作から発表までの過程を報告し、学生の振り

2. 授業内容

2-1. 授業について

履修者はAクラス22名、Bクラス28名、Cクラス26名、Dクラス29名、Eクラス31名の計136名であった。授業は各クラスごとで実施した。

「保育内容・表現」の授業の目標は、「歌ったり、踊ったり、イメージを膨らませて創作活動をする等、表現する楽しさを味わい、自己表現力を高める。また、幼児の豊かな感性を伸ばし表現する意欲を育てるための援助の方法、指導法を考える。」とした。

授業内容は、以下の通りである。

1. ガイダンス、授業方針の説明
2. 手あそび、指あそび、リズムあそび、リズムダンス (1)
3. 手あそび、指あそび、リズムあそび、リズムダンス (2)
4. 手あそび模擬授業、元気の出る体操を考える
5. 手あそび模擬授業、指あそびから身体表現へ
6. 手あそび模擬授業、絵本から身体表現へ
7. 手あそび模擬授業、オペレッタ 班分け、演

目・配役決め

- 8~14. オペレッタ制作.
- 15. オペレッタリハーサル
- 16. オペレッタ合同発表会 (試験日)

授業前半では、手あそびやリズムダンスをはじめ、表現に関するあそびの体験と指導法を考えた。また第4~6回目の授業冒頭部分で毎時間3名の学生が先生役となり、1人5分程度の時間を設けて手あそびの模擬授業を行った。

授業後半では、まとめとして音楽、造形、身体表現を総合した劇あそび「オペレッタ」を制作、発表を行った。

①~⑨の間、教員はアドバイス・補助を行った。

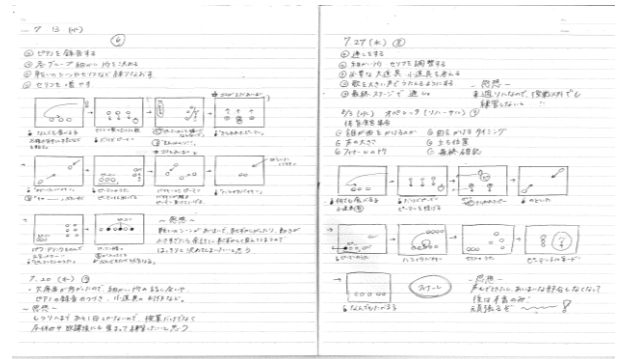


図2 記録ノート

2-2. オペレッタの授業実践

期間：2016年6月1日(水)~8月9日(火)に行われた第7~15回目までの9回(1回につき90分)

参加学生：136名

授業の流れ：①班分け、演目を決定した。

演目は、株式会社メイトが出版している「ベストセレクトオペレッタ」及び「オペレッタ」の教材本から班で気に入った演目を選出させた。各班の演目は、表1の全14作品である。演目決定後、脚本の楽譜の部分だけを学生全員に配布し、配役を決めた。

②ゲスト講師を招いて構成・演出指導を受けた。

③~⑧作品により、進行の速度が異なるため、班は進行表を作成し、自主的に進行(図1参照)。

図1 オペレッタ進行表

構成・演出、振り付け、舞台構成、舞台音楽、衣装、大道具、小道具など、発表会に向けて学生が主体的に

表1 オペレッタ発表会演目一覧

No.	クラス	班	演目
1	A	1	グリーンマントのピーマンマン
2		2	おおかみと7匹のこやぎ
3		1	おくびょううさぎ
4	B	2	海のダンスパーティー
5		3	おつきさまとおともだち
6	1	いつまでもともだち	
7	C	2	かっぱわくわく
8		3	おおかみと6匹のこやぎ
9	1	ブレーメンの音楽隊	
10	D	2	ゆめたまご
11		3	ありがとうにありがとう
12	1	金のがちょう	
13	E	2	ブレーメンの音楽隊
14		3	とんがり山の大魔神

オペレッタ制作~発表までの留意点を次のとおりとした。

- ① 1班を10名前後で構成する
- ② 裏方だけでなく、必ず全員に役を振り分けること
- ③ 演出は全員で役割分担をして行う
- ④ 背景・衣装・大道具・小道具に至るまで全員で制作する
- ⑤ 材料費は5,000円までとする
- ⑥ 上演時間は1班10~15分
- ⑦ 本番はマイクを使用しない
- ⑧ 発表会終了後、授業ノートに振り返り(自由記述)を書いて提出する
- ⑨ 各班の会計報告書を提出する

期日	月/日	予定内容	1	2	3	4	5	6	7	8	9
9	6/29	前期の復習	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10	7/1	前期の復習と修正	—	—	—	—	—	—	—	—	—
11	7/8	通し練習	—	—	—	—	—	—	—	—	—
12	7/15	中間発表	—	—	—	—	—	—	—	—	—
13	7/22	通し練習	—	—	—	—	—	—	—	—	—
14	7/29	リハーサル	—	—	—	—	—	—	—	—	—
15	8/10	舞台発表	—	—	—	—	—	—	—	—	—

準備した。考えた構成・演出、振り付けは各自でノートに記録した(図2参照)。

⑨オペレッタ発表会リハーサル

2-3. 発表会

日時…2016年8月10日(水) 9:30 開演
場所…本学アリーナ

3. 研究方法

オペレッタ制作～発表会までの振り返りを発表会終了後に授業ノートに書いた学生のレポートから上記の問題について分析、考察する。

4. 結果

発表会終了後の振り返りレポートから全体に共通した内容や少数派な記述のいくつかを抜粋し、以下に記載する。

- ・既存の物語がある状態だったから進めやすいとおもっていたが、振付や登場の仕方(演出の仕方?)が難しかった。通して演技すると、思っていた動きと見栄えかたが違ったりした。
- ・歌詞(言葉)に合わせて振付を考えるのが難しかった。曲のテンポがゆっくりなので、舞台全体を使って動きを表現するようにした。楽しく表現できた。この経験を将来子どもたちに指導していきたい。
- ・他のオペレッタと違ってシーンがほとんど変わらないので、立ち位置や登場人物の動き、はける方向などを工夫した。観客がどうすれば楽しく見られるか考えた。できあがるにつれて、課題点がみつかって時間が無い中でやる事が多かった。小道具が思っていたより小さく見えてしまった。
- ・物語はあっても、音源を録音したり演出を考えたり、1から作り上げるのは難しかったが達成感があった。この経験を保育士になったときに生かしたい。
- ・物事を決めていくにあたり、物語を理解するのに苦労した。観客が決められた時間の中で理解できるよう、セリフを足して工夫した。
- ・オペレッタを通して、人と関わりをもつことが楽しいと思った。
- ・最初は単位の為という意識が強かったけど、みんなと活動しているうちに、真剣に取り組むように

なっていた。自分たちでオペレッタをするのは難しいと感じたのに、子どもたちに指導するのはもっと難しいと思う。

- ・作品を作り上げる過程が大変だった。途中友達と喧嘩しそうになり、嫌になりかけたが、互いに意見を言い合って良い作品ができた。
- ・班全体で協力体制が感じられず苦労した。やる気のある人たちだけで頑張った。
- ・劇をするのは小学校以来で、どんな風に振り付ければよいのか、考えるのが難しかった。何でもよいから体を動かしていると、アイデアが浮かんできて、リズム運動は、頭で考えるより体を実際に動かすことが大切だと気付いた。
- ・制作活動が進むにつれて、それぞれが案を出して良いものができていくのが目に見えてわかって楽しかった。なかなか振りがでてこなかったり、役者の配置が難しかったりしてその度に話し合いをしてたくさん新しいアイデアが出てきた。大学に来て初めて友達と協力して何かを作って、改めて人との関わり方の難しさを感じ、共感できたり友達の新しい部分を発見できたりした。
- ・もう少し衣装やセットの準備の時間を増やせばよかった。
- ・動きを大きく見えるようにする動き方が難しかった。みんなと意見を合わせるのが難しかった。準備物をもっと早くから頑張ればよかった。

5. 考察

レポートには、「協力」「工夫」「楽しさ」「難しさ」「意見」「理解」というキーワードが非常に多くみられた。

履修者は、1年次に先輩のオペレッタ発表会を観賞しており、オペレッタのイメージは持っていたが、いざ制作活動が始まると、それぞれの表現力の個人差や作業の多さに戸惑いを感じている学生が多かった。しかし、作品を作り上げていくにつれて、班内での意見交換がなされ、スムーズに作業が行われるようになっていったことが示唆される。最初は遠慮していたが、より良い作品にしたいという思いから、学生同士で指導し合う姿が見られるようになったり、努力することに楽しさを見出していったりしたのではないかと考えられる。

しかし、班の中には、最後まで心を通わすことが

できず、一部の班員だけに大きな負担がかかり、発表会を終えても十分な達成感や充実感が味わえなかった学生もいた。

オペレッタを実際に体験することによって、学生たちの造形表現力、音楽表現力、身体表現力についてのスキル向上がみられた。これらは、学生のレポートからも読み取れた。また、発表会が近づくにつれ多くの班やクラスの雰囲気は良くなっていき、発表会後は達成感と充実感に満ち溢れていたことから、オペレッタは表現力を高めることはもちろん、仲間との協同作業という点で、保育者としての資質向上に対する教育効果が高いといえる。

6. 引用文献・参考文献

- (1) 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領解説 東京：フレーベル館
- (2) 長根利紀代 (2004) 保育者をめざす学生への授業効果について－オペレッタを教材として－：名古屋柳城短期大学研究紀要 第26号 91－106
- (3) 古屋祥子、沢登芙美子、高野牧子 (2012) 保育者養成校におけるオペレッタ創作活動の教育的効果－2011年度「総合表現演習」の実践から－：山梨県立大学 人間福祉学部紀要 Vol.7 31－48

ピアスーパーバイザーからのコメント

本論文は、「表現力向上と仲間との協力」という2つの狙いを持った「オペレッタ」というユニークな取り組みの授業実践の記録である。

特に、「仲間との協力」という面では、グループワークは一般に一部の班員にだけ大きな負担がかかる危険性を常に持っており、この取り組みにおいてもその危険性がある中で、多くの班がそれを乗り越える経験をし、当初の目的を達成できたという点でも、意義深い活動であると考えられる。

(担当：田邊 文彦)